

## ユーザ定義手続き—proc—

Copyright ©2006 by Shigeto R. Nishitani

### proc

複雑な手続きや、何度も繰り返すルーチンはprocで作る。

### 引数

procは以下のようにして作る。

Mapleスクリプト	Maple文法	C言語
<pre>test1:=proc(a)   printf("%f\n",a) ; end proc;</pre>	<pre>ユーザ関数名:=proc(仮引数)   動作 end proc;</pre>	<pre>void ユーザ関数名(仮引数){   動作 }</pre>

procの呼び出しは、以下のようになる。

```
> test1(13);
13.000000
```

引数としてはどんな型(変数や配列)でもよい。複数指定するときにはコンマで区切る。引数をprocの中で変更すると怒られる。下で示すglobalで取り込むか、local変数にコピーして使う。

### 戻り値

procの戻り値はreturnで指定される。return文がないときは、最後の動作結果が戻り値となる。

Mapleスクリプト	Maple文法	C言語
<pre>test1:=proc(a)   printf("%f\n",a) ;   return a+1; end proc;</pre>	<pre>ユーザ関数名:=proc(仮引数)   動作   return 戻り値; end proc;</pre>	<pre>double ユーザ関数名(仮引数){   動作;   return 変数; }</pre>

### グローバル(大域)、ローカル(局所)変数

```
変数名:=proc(引数)
  local 変数;
```

```
global 変数;
動作の記述
end proc;
procの内部だけで使われるのがlocal, 外部を参照するのがglobal. global,localを省略してもMapleが適当に判断してくれる。
```

### 例題

リストを受け取ってその和を返すprocをつくれ。aというリストを受け取り、要素数を見て、和をとり、最後にその和を返す。

```
> total:=proc(a)
  local S,n,i;
  n:=nops(a);
  S:=0;
  for i from 1 to n do
    S:=S+a[i];
  end do;
  return(S);
end proc;
```

以下のように実行する。(結果は未表示)

```
> aa:=[3,5,7];
total(aa);
```

### 演習

次のMapleスクリプトを指示に従って書き換えよ。

```
> a:=35; b:=29;
c:=a+b;
printf("%3d + %3d =\n",a,b);
printf("Answer =%3d\n",c);
```

- a1, b1を仮引数として  
printf("%3d + %3d =\n",a1,b1);  
で表示する手続きsum1を作成せよ。sum1(a,b);で呼び出せ。
- a,bを仮引数とし、その和を返す手続きsum2を作成せよ。戻り値を受け取って、  
printf("Answer =%3d\n",c);  
として表示せよ。
- bだけを引数として、グローバル変数aとの和を局所変数cc1にいれて、その2乗を返す手続きsum3を作成せよ。

do-loopの演習で作った素数判定プログラムをproc化せよ。